

オーディオ実験室収載

モーツアルト盤を聴く(107)(HP 収載) —最新アナログシステムでの試聴(107)—

1. 始めに

前報(106)に引き続き、新たに入手したモーツアルトのアナログ盤を最新アナログシステムで試聴していきます。

2. モーツアルトのアナログ盤の試聴方法

モーツアルトのアナログ盤の由来およびアナログシステムの状況は前報(1)のとおりです。今回は、LINN LP-12 を使用します。

試聴システムは仮想アースに加えて、スピーカーアキュライザーSPA-7 が加わっています。さらにスピーカーアキュライザーの接続をバナナプラグに置き換え、電解コンデンサーを追加し、電磁波吸収テープ NRF-005T をバナナプラグに巻いています。音源は、新たに入手したモーツアルトのアナログ盤を使用していきますが、今回は器楽協奏曲です。

Westminster WL5307

モーツアルト クラリネット協奏曲イ長調

ファゴット協奏曲変ロ長調

レオポルド・ウラッハ (クラリネット)

カール・エールベルガー (ファゴット)

ア r トウール・ロジンスキー指揮ウイーン国立歌劇場管弦楽団

3. モーツアルトのアナログ盤の試聴結果

Westminster 盤ということで、Columba、正相、第4時定数 Low で聴いていきました。

クラリネット協奏曲は、お馴染みの曲で、モノラル盤であり、レンジもさほど広くはありませんが、凝縮したようなふくらみのあるクラリネットの演奏です。

ファゴット協奏曲は、あまり聴く機会がありませんが、柔らかいファゴットの音色で優雅な演奏です。モノラル盤ながら演奏のニュアンスは十分に聴き取れます。

4. まとめ

ターンテーブルアキュライザー、ダンパーフレーク、Crystal E、スピーカーアキュライザーなどの総合的な効果により、モノラル盤ながら、上記の盤の特徴がよく把握できます。

以上/